

6月2日・ハクジューホール●リスト
《巡礼の年 第1年「スイス」》《巡礼の
年 第2年「イタリア」》

今年デビュー30周年を迎えた三
松。遡ること、三松が日本音楽コン
クールで優勝したときの、ベートー
ヴェンの「ピアノ協奏曲第4番」が
懐かしく思い出される。間もなくし
てデビューを果たし、その最初のプ
ログラムに三松の恩師のひとりであ
る安川加壽子が記した「ピアノニスト
としての手」の一文。安川が言う三
松の恵まれた手は、それからキャリ
アを重ね、いま充実期にある。今回
の、記念の舞台に用意したのはリス
ト。自身の音楽人生において常に傍
らにあった作曲家であり、楽曲は満
を持しての大曲《巡礼の年》。

《第1年「スイス」》の第1曲《ウィ
リアム・テルの聖堂》から驚く集中
密度で、分厚い和音は古の巨匠のよ
うな豊潤な響き。一転して印象派の
絵画のような繊細な色彩感(2)や
優しい描写(3)。クリスタルのよう
な変幻の美しい響き(4)から牙を
むくような鋭い音列(5)、ヘオーベ
ルマンの谷ぐや《郷愁》では深遠なド
ラマを聴かせる等々、めくるめくり
ストのピアノニズムを堪能。この日、
長らく親交のある神津カンナをゲス
トに迎え、曲の合間にトークも。解
説やさまざまなエピソードなど神津
の進行は上手く、後半の《第2年「イ
タリア」》では《ペトラルカのソネット
トク》(のソネット「定型詩」)を朗読。最
終曲《ダンテを讀んで》は集大成の
ような熱量で、時に憑依の様相。リ
ストの編み込んだ和声をも指で描
き、ピアノと一体化した多彩な響
き。その裏味の響きは、良き時代の
ジュリアード音楽院サウンドと言え
る。安川も、ジュリアード時代の恩
師で逝去間もないマーティン・キャ
ニンも、天国で嬉しく誇らしく聴い
ていただろう。